公益財団法人 国際通貨研究所
Institute for International Monetary Affairs
メールマガジン

2024 年 12 月 2 日

大英帝国の変遷から学ぶ教訓 ～文学作品の世界観の観点から～

拓殖大学　政経学部教授
（政治経済研究所・所長）
IIMA 客員研究員　松井謙一郎

2023 年 4 月に大学の政治経済研究所の所長職に就いてから 1 年半が経過した。21 世紀になってからは、民主主義社会の分断、資本主義における経済格差拡大などの問題も顕著になっている。研究所のカバーする領域は社会科学の法律・政治と経済の 2 分野が依然として中心となっているが、民主主義と資本主義の在り方が根本から問い直されている中で、現代社会をより幅広く捉える視点の必要性を痛感してきた。

昨年度は、人文科学へ視野を広げる試みとして歴史研究の潮流となっているグローバル・ヒストリーの知見の活用に取り組んだ。グローバル・ヒストリー研究は、学際性・時間軸の長さ・空間軸の広さが大きな特徴で、文献調査・一国の歴史を中心とした伝統的なアプローチとは対照を成している[1]。この分野では欧米のアジアへの優位を問い直す事が重要なテーマ[2]であり、昨年度までこのテーマに重点的に取り組んできたが、今年度は「大英帝国の歴史から学ぶ教訓」を重点テーマとして位置付けた。

小さな島国が世界的な繁栄のネットワークを築いたものの、その後衰退の道を辿ったという英国の歴史から、日本は教訓を学ぶべきという問題提起は目新しいものではない。本稿では、文学作品・小説を足掛かりに大英帝国の萌芽期から解体期という数世紀に渡る長い歴史を振り返り、その教訓を改めて考えてみたい。本稿で言及する文学作品は英文学の中では著名なものばかりであるが、作品に表現されている世界観を読み解きながら大英帝国の時間軸の中に位置付けていく事が主目的であり、「文学作品を活用したグローバル・ヒストリーのアプローチ」であると筆者は考えている。

---

[1] 水島司『グローバル・ヒストリー入門』（山川出版社、2010 年）が代表的な入門書
[2] 秋田茂『イギリス帝国の歴史　アジアから考える』（中公新書、2012 年）、羽田正『興亡の世界史　東インド会社とアジアの海』（講談社学術文庫、2017 年）のアプローチが大変参考になる

大英帝国の変遷と関連する文学作品

時期区分	概要	関連する文学作品・小説
萌芽期 （17 世紀）	清教徒革命・名誉革命 東インド会社の設立 海外（大西洋世界）への移住	シェイクスピア 『ベニスの商人』『オセロー』など
発展期 （18 世紀）	仏との植民地抗争の勝利 大西洋世界の覇権確立 一方で、米国独立の教訓	デフォー『ロビンソン・クルーソー』 スウィフト『ガリバー旅行記』
絶頂期 （19 世紀）	ヴィクトリア朝での繁栄 自由貿易帝国主義 選挙権拡大・国民統合	チャールズ・ディケンズ 『クリスマス・キャロル』『二都物語』 『荒涼館』
衰退期 （19 世紀末～ 20 世紀初頭）	米独の急速な台頭 泥沼化したボーア戦争 孤立政策転換・日英同盟締結	コナン・ドイル 『緋色の研究』『4 つの署名』など 夏目漱石『倫敦塔』
解体期 （戦間期、20 世紀 後半）	英国連邦の緩い連帯 対独融和政策・第二次大戦 植民地独立・冷戦	ジョージ・オーウェル 『動物農場』『1984』 カズオ・イシグロ『日の名残り』

（出所）各種資料をもとに筆者作成

表に関して、区分を行った各期について概要を補足すると以下の通りである。先ず大英帝国の萌芽期である 17 世紀は、国内は革命で揺れ動きながらも議会政治が確立していく中で、東インド会社設立やアイルランド・北米などへ海外への移住が見られるようになるが、この時点ではヨーロッパの他の列強国と横並びの状況であった。18 世紀になると国内の政治の安定を背景に、フランスとの植民地抗争に勝利して大西洋世界で優位な立場に躍り出る。但し、米国の独立という植民地喪失の苦い経験も味わっている。

19 世紀の中盤・後半がいわゆるヴィクトリア朝の繁栄期であるが、世紀末になると陰りが見られるようになる。20 世紀に入って大英帝国が解体していく過程で自国の立ち位置の摸索が続いて、21 世紀になってからは EU からの離脱後の国内政治の迷走・政権交代という形で試行錯誤が続いているのが、英国の現代の歴史であると言えよう。

大英帝国の変遷から得られる最大の教訓は、「時代の変化に対して試行錯誤を重ねつつも柔軟に変化していく必要性」であると筆者は考えている。ヴィクトリア朝の絶頂期に至るまでには萌芽期・発展期の長い時間を要しており、その過程で 17 世紀の内戦、18 世紀の米国の独立といった大きな苦難を経験している。絶頂期に達したものの、それも長続きはせずに衰退の道をたどる。2 回の世界大戦では戦勝国となったものの、世界的な大国として米国が存在感を高めていくのとは対照的な道を辿っている。

次に、表の関連する文学作品・小説について内容を補足すると次の通りである。シェイクスピアの戯曲が書かれた 17 世紀の初頭の英国は、ヨーロッパの中では脇役的な存

在であり、『ベニスの商人』『オセロー』では当時のベネチアの繁栄・オスマントルコの脅威など地中海世界が関心の中心であった。更に、18 世紀に入ってからの『ロビンソン・クルーソー』『ガリバー旅行記』の小説は、英国が着実に海外に拠点を確保して勢力範囲を拡大していく状況が背景にある。

19 世紀に入ってからは、革命で揺れ動くフランスとは対照的に安定している英国が『二都物語』で描かれている。他方で、『クリスマス・キャロル』『荒涼館』に象徴されるように経済格差が大きな社会問題となってきた。19 世紀末を迎えると英国の地盤沈下は意識されるものの、『緋色の研究』『4 つの署名』でそれぞれ描かれている成金主義的な米国、英国の富の源泉のインドに象徴されるように、世界経済の中心的な存在としての英国という世界観は保たれている。戦時・戦後期は、対独・対ソ連政策、冷戦対応の難しさ・英国の苦悩が、『動物農場』『1984』の小説を貫くテーマになっている。

最後に、『日の名残り』は、2017 年にノーベル文学賞を受賞して大きな注目を集めるようになった日系イギリス人のカズオ・イシグロ氏の作品で、20 世紀前半の落日の英国の姿が登場人物のエピソードを通じて情緒的に描かれている。氏の活躍に象徴されるように多様な文化を受け入れる英国の懐の深さに大英帝国のレガシーを感じる。

前述の内容は英文学を専門とする方々にとっては常識の範囲内の事柄であろうが、これらの文学作品の世界観を読み解いていく作業が、筆者にとっては歴史との対話になったと感じている。その過程で、事実やデータの検証が中心となる社会科学とは異なる人文科学の問題（世界観・価値観の相対性、一筋縄ではいかない社会、その中で生きる個々の人間の苦悩など）の重みを改めて実感した。

現代では原典・専門書籍に頼らずに、ネット上の媒体を活用しながら、文学作品への理解を深めていく事が可能である。ネットに投稿されている様々な動画や作品への感想に接する事で、文学作品の読み解き方の多様性を認識できる。文学作品の様々な読み解き方を考えていく事や、それを通じて個人の世界観・歴史観を改めて考え直していく事は、閉塞感が続く日本において重視されるべき営みではないだろうか。

（IIMA メールマガジンへの寄稿）

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2024 Institute for International Monetary Affairs（公益財団法人 国際通貨研究所）
All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.
Address: Nihon Life Nihonbashi Bldg., 8F 2-13-12, Nihonbashi, Chuo-ku, Tokyo 103-0027, Japan
〒103-0027　東京都中央区日本橋 2-13-12 日本生命日本橋ビル 8 階
e-mail: admin@iima.or.jp
URL: http://www.iima.or.jp